



が教えてくれていること：

私たちの未来に育てたい10の姿

掛札逸美

心理学博士 保育の安全研究・教育センター



略歴：1964年生まれ。健診団体広報室勤務を経て、2003年、コロラド州立大学大学院留学。安全と健康の心理学が専門。コロナに関する情報をFacebookページで毎日発信中。センターのウェブサイト（「保育の安全」で検索）からリンク。

日本における新型コロナウイルス感染症（以下、「コロナ」と略）をめぐる状況は、混迷を深めています。クライシス（危機）・マネジメントにおいて必須である「信頼されるリーダーシップ」がないなか、各自治体や「専門家」を称する人たちが言いたい放題を言っているだけ。米国も似たようなものですが、あちらではエイズ危機を乗り越えた経験を持つアンソニー・ファウチ博士が（大統領と闘いつつ）陣頭指揮をとっています。一方、ニューヨークやドイツ、デンマーク、台湾のように、リーダーシップが一貫した対応を取り続け、感染拡大を抑えて

いる国も複数あります（※）。コロナの流行はまだ終息しません。ワクチンや治療薬の開発が成功して使われ出すとしても来年度以降。成功したとして、成果が世界で感じられるようになるには数年かかる。世界の感染症医、疫学者の一致した意見です。世界が今年の末までに、二〇一九年十二月の状態に戻ることはありません。次の危機の時、同じ混乱をきたしていたら、この国は滅びるかもしれません。私たちの未来（子どもたち）を良い方向に向けるため、今日からおとな一人ひとりがすべきことを案として書き並べてみました。

「なぜ?」「ほんと?」のおとなを育てる

個人が何を言うのも自由です。知事が「うがい薬に効果あり!」と言うのもこの際、かまいません（有害な薬を治療薬として喧伝する大統領もいますから）。鍵は、情報を鵜呑みにしない市民を育てること。「ほんと?」ちよつと調べてみよう」と必ず思うおとな、「なぜ効くの?」「なぜダメなの?」を考えるおとなを育てること。

学校で教わる程度の知識は今すべて、ネット上にあります。一方、ネット上には間違つた情報も嘘の情報も、詐欺さえもあります。教室に何時間も座つて知識を詰め込む必要など、もうないので。それより、情報（学校で教わる知識も）を「ほんと?」「なぜ?」と一度、正しく疑い（これがいわゆる「クリティカル・シンキング critical thinking」）、確認したうえで自分の意見を作っていくスキルが不可欠です。小学校高学年になつてからでは、この習慣が身につかないことも、長年の研究から明らかです。幼児の「どうして?」「ほんと?」には、「考えてみて」「一緒に調べよ

感染症対策に緊張の日々

新型コロナウイルス感染防止 対策のために

- ・マスク着用(大人のみ)
- ・手洗い(石けん使用)または手指消毒
- ・検温(玄関で検温させていただきます)

ご協力をお願いします。



う！」と応える。おとなの「正解」を与えない。まして「何度も聞かないで！」を言わない。「はい」「いいえ」や選択肢で答える「閉じた質問」ではなく、考えて自由な答えを言える「開かれた質問」をする。おとな自身、日々、疑問を持ち、考える習慣を身につけましょう！ 他人の言うことを盲信してついていったら崖っぷちに立っていた、ということがないように。

算数の原理がわかるおとな

「日本は感染者も少なく、死亡者も少ない」…、嘘です。東アジアと東南アジア全体は現状それなりに少ないのですが、各国の人口あたりで死亡率を計算すれば、日本はオーストラリア、韓国、台湾よりも高い。「率」、つまり、割り算をできていないのです。

もっと深刻なのは、「陽性率」。毎日、都道府県が出す感染者数は数にすぎず、検査数に対する陽性率を出さなければ意味がありません（検査日も感染判明日もバラバラなので、実際は「七日間移動平均」という数値を使う）。「検査数が増えたから、感染者が増えただけ」と言うのであれば、陽性率は下がっていくはずです。たとえば、東京都の陽性率は、八月上旬まで微増していました。

「日本の子どもたちは国際比較で

も算数ができている」…、そうかもしれません。でも、計算ができて、「なんのためにこの計算をするのか？」がわかっていないのでは…。もちろん、未就学児施設で割り算は教えません。でも、「割合」「率」「比」の概念は遊びの道具を分ける時、食事の時、グループに分かれる時等々に出てきます。

科学の基本を理解するおとな

科学とは、簡単に言えば「対象にしているもの／こと／行動等の定義が明確で、誰がその対象を見たり調べたりしても、同じように判断できる」方法の上になされること、です。たとえば、地球の重力の定義ははっきりしていて、誰が測っても同じ。それが科学。

「子どもがしっかり育っているかどうか調べる」なら、「しっかり育つ」の定義が明確、調べる方法が具体的、別の集団で別の人たちが調べても方法がぶれないこと。見ている数人の先生が「この子たち、しっかり育ってるね」と合意した…、これは「科学」ではありません。

コロナであれば、ひとつの調査やデータから出てきた結果を結論にしない。誰かが何かを主張していたら「ほんと？」と考え、別の結果がなければ調べる。科学的思考の基本です。子どもたちは調べるのが大好

きですから、「これは？」「ほんとかな？」「こうしたらどうなる？」等々、クリティカル・シンキング（正しく疑い、情報を集めて、考える）を身につける基礎が育ちます。

話合えるおとな

「なぜ？」「ほんと？」は一人では難しい。考え方の癖は一人ひとり違いますから、同じテーマでも園内で話し合えば、違う見方が出てきます。「違い」は大事な価値です。「多様性」なんて格好をつける必要はありません。「違い」が価値なのです。ビジネスの研究では、組織の中に違い（人種、性別、年齢等すべて）があればあるほど、その組織は生産性が高く、成功することが明らかになっています。

でも、この文化は「同じ」が好き。「和」が好き。だから、自分の意見を言わない、「なぜ？」「ほんと？」を口にしない。せつかくある「違い」が活かされません。

個人の感情（好き嫌い）、年齢、立場といった壁を意識的にどかして、「私／僕はこう思う」「僕／私はこう思う」…「じゃあ、どうしようか。今のゴールはこれだから…」と話し合う練習、園の中でどれだけできていますか？ 子どもの自主性を育てたいと言うなら、まずはおとなから。

（次ページへ）



自分を守ることを できるおとな

コロナの場合、「自分を守る具体的な行動」が、家族や周囲を守ることにつながります。航空機でも「酸素マスクはおとなが着用してから、子どもに」と言います。まず自分を守ることができなければ、他人を守ることはできません。

ところが、この文化は「自分」を意識の真ん中に置くことが大嫌い（心の中では、皆、自分中心なのに）。でも、「私」「僕」がなければ、「あなた」はありえません（日本語は主語を言わずに済む珍しい言語なので、よけいにこの部分が助長されています）。話し合いでも「私／僕はこう考える」と明言すべきなのに、「みんな、〇〇と知っているよね」「〇〇するのが当然だよね」と言ってしまう。

「私は」「僕は」と明言することは自分の行動、発言に責任を持つことです。そして、「私／僕は、家族を守るために自分を守りたい。だから、飲み会には行きません」と言えるか言えないかが、今は人生を変えてしまいかも知れないのです。

他人を守ることを できるおとな

「自分を守りたい」という強い感

情があるから、「他人を守る」という感情も生まれます。

コロナに感染して差別された、石を投げられた、移転を強いられた…、こういった事例が後を絶ちません。でも、「自分がかかってもおかしくない」という事実を理解して、「感染をできる限り予防しなければ」と思っている人（＝自分を守る感覚がある）は、差別に加担しないでしょ。他人を守ることが自分を守ることだとわかっていくからです。

「思いやり」「やさしさ」などという、聞こえがいいだけであまい言葉を使うからわかりにくいのです。「自分がされたらいやなことは絶対にしない」「いやだったら、いやだと言う」、子どもたちに育てるのはここ。「和」を重んじすぎて、差別のつらささえ自分の責任だと思いつみ、泣き寝入りをするおとなを育てていたら、差別は永遠になくなりません。そして、感染症のようなものの場合、差別は解決を難しくします。感染隠しが増えるからです。

変わ（え）ることを 怖がらないおとな

コロナは世界を激変させています。人間も生き物ですから、変化は嫌いです（ステイタス・クオ・バイオ・バイアス status quo biasという認知の歪み）。ですが、適応力があるのも人間。そして、この列島に住んでいる人たちは

は文化的にも適応力が高いはず。自然災害も多く、「ゼロからやり直す」前向きと強さを備えている文化のはずなのです…。

個人には適応力があるのに、政府から自治体までつながるシステム、企業というシステムが硬直しているのが現状で、その背景にはシステムにおけるリーダーシップの欠如という最大の問題があります。でも、そんなことは言っていられません。コロナに伴って、産業構造も働き方も、保育も変わっていくでしょう。十年後、二十年後、今の子どもたちが生きる世界は、おそらく今とはまったく違います（コロナ＋気候変動＋その他）。

おとなたちが変化を楽しみ、乗り越えていく姿が、子どもたちの適応力のロールモデルになります。

「正しく怖がる」「こが できるおとな

「正しく怖がる」は、もともと公衆衛生のキャッチフレーズです。むやみに怖がり、嘘や噂に惑わされるから予防が難しくなり、（感染症に限らず）差別も生まれるのです。

コロナの感染リスクはゼロにできません。でも、感染リスクは下げられます（手を洗う、マスクをする、距離をとる）。おとながするだけでも、子どもを守る役には立ちます。「今の時点で科学が言っている結果」



を理解して、怖れるべき点は怖れ、怖れる必要のないことは怖れないでいるおとなでいましょう。同じことは、深刻事故の予防にも災害対策にもあてはまりません。深刻な結果が起こりかねないなら、「起こらないはず」と思い込むのではなく、深刻な結果を防ぎうる具体的な予防行動をする、それだけのことです。

未来（子ども）を 考えられるおとな

日本は世界の中で唯一、国として保育園を開け続けてきました。保護者の就労（経済）と子どもの成長・発達支援の価値が、子どもや職員の感染リスクを上回るとみなしたのでしよう（そこまで明確だったとは思いませんが）。そして、保育施設はNOを声に出しませんでした。この選択が結果的によかったのかどうかはわかりません。十年後、二十年後になっても、結局、わからないままかもしれません。

でも、よりよい未来を作る、それは社会に属するすべてのおとなの責務です。未就学児施設にだけ、保護者にだけ責任を押しつけるなら、その社会は未来を放棄していることになりません。

「10の姿」ができる 職員育てを！

コロナ自体の情報は日々新しくなり、変わっていつていますが、今、来々、五年後、この文化に必要な変化の化身は変わりません。コロナのような危機に弱い社会であることを露呈したのですから。

ここまで述べてきたことをできるおとな、職員を育てていけば、保育のあらゆる場所で活かすことができ、園の価値を高めることができます。コロナ自体は価値のない災いですが、災いに取り組んでいる自分たちの姿から学ぶことはたくさんあります。



の文化のもうひとつ、とても悪いクセが出ないように…。この文化の人たちは、なにかを「正しく」「完璧に」「全部」できないと失敗とみなしてしまふ、「ダメ」と感じてやめてしまふのです（米国に五年いた者として、この完璧主義ぶりにはうんざりします）。

「マウス・シールドもいいと思うのだけれど、赤ちゃんが縁の部分さわってしまったら危険だと思って、まだ使っていません」：「ならば、抱っこしている時は布マスク。食事の介助の時だけマウス・シールドにしては？」。

少しでもプラスがあるなら、してみればいい。少しマイナスがある（かもしれない）から全部やめる、試さないなんて、もったいない。特に、今のように、マイナスが多い時は、小さなプラスが大事。危機の時こそ、子どもは正解を求めない存在。

子どもは完璧主義じゃない存在。子どもは、生きていくこと自体を味わっている存在。子どもたちにこそ、今のおとなたちは育ててもらいましよう。そして、その百倍、千倍のお返しを、赤ちゃんに、子どもたちにしましよう。

※この四つの国の共通点。国のリーダーが女性なのです。「保育は女の社会だから」なんて言って、自分たちをさげすむのはやめましよう。

感染症対策に緊張の日々

